

復刻版『幼児の教育』の頁をくりながら、興味深い幾つかのことに気付かされた。例えば、時折変えられる記事の分類のしかたに、大げさに言うならその時代の意志や文化が反映されている、と言う発見もその一つである。

第三巻までは、「子ども・家庭・学術・史伝・文苑・説林・雑録・彙報」というクラシカルな分類が続き、以後、「子ども・婦人と子ども」という大まかな分類になり、更に「保育者のため」「読書の葉」という欄が附け加えられたりしている。そして、第七巻第四号から、項目を設けて記事を分類することは、廃止された。

初期の誌上を賑わした「文苑」欄の中心は、詩歌であった。時に、翻訳小説や随筆も顔を見せるが、欠かさず頁を埋めているのは、数篇の定型詩と和歌であった。後に、これに俳句が加わるようになる。保育界とは格別の関係を持たない人

にも寄稿を依頼したらしく、創刊号には、代表的な女流歌人中島歌子が、表紙の撫子の絵を詠みこんで、次のような一首を寄せている。

うつくしくまなひの庭に咲にけり

母のをしへのなてしこのはな

また、「幼稚園唱歌」で知られる東くめも、この欄の常連であった。「おかえりのうた」や「鳩ぼっぼ」の作者が、「玉よりたふとし 稚児のころ 花よりうるはし ちこのすがた」などと、言葉の彩に腐心している姿も一興に値いよう。

ところで、これらが物語るのは、保育者の、そして同時に女性の人間的基盤に關して、当時の文化が一つの前提を持っていた、と言うことではないか。すなわち、子どもの前に立つ大人は、当然、豊かな教養に支えられているべきであるということ。そして、詩歌のたしなみは、その象徴だったのである。(本田和子)

## 幼児の教育 第七十八巻第十一号

十一月号 © 定価二五〇円

昭和五十四年十月二十五日 印刷  
昭和五十四年十一月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一の一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一  
発売所 株式会社 フレーベル館  
振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所フレイベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。